

私、「女性枠」でした



石田玉青

首都大学東京 大学院都市環境科学研究科 金の
化学研究センター
[192-0397] 八王子市南大沢1-1
特任教授, 博士(工学).
専門は固体触媒化学.
tamao@tmu.ac.jp

www.haruta-masatake.ues.tmu.ac.jp/

今回「仕事と私事」欄の執筆依頼をいただき、ありがたいことではあるものの、ワークライフアンバランスな筆者にとっては、私事を書くのはとても難しい。仕事に関しては、前任の大学では女性枠で採用されたので、ちょうど「男女共同参画」の波に乗って得をしたほうかもしれない。学内の競争的研究費や英語論文執筆支援などの制度も活用させていただいた。女性研究者支援の一環として託児施設の充実や産休育休中の補助者の雇用などの施策（こちらのほうが目玉の施策だと思うが）もいろいろ用意されていたが、残念ながらそれら制度を使う状況になることはなく、大学のほうでは折角体制を整えたのに肩すかしを食らわされたと思っているかもしれない。日本大学の坪久子先生が本欄（2012年7月号）で指摘されているように、「女性枠で採用されたなんて言われたくないという気持ち」は筆者の中にもあったが、男性であっても「あの人は得をしている」と言われることはあるので、そういう場合は馬耳東風でやり過ごすのが一番だと最近では思っている。とは言っても女性枠に関して逆差別だという意見もある中でまだまだ声を大にして言うのは難しいのが現状だろう。

出産・子育てのような大イベントがない限り、採用後は女性枠だからといって仕事の内容がほかの教員と変わるわけではないので、とくに何かを意識することはない。それでも筆者がいた学科では女性教員が筆者を含め4名と協力講座1名の計5名となり、とくに同年代が多くて心強い思いをした。普段は研究分野が違うし、建物も違っていたのでそれほど頻繁に顔を合わせていたわけではないが、時折女子会が開催されて、自分一人ではないことがとてもありがたかった。0と1は大きく違うが、1と5もやっぱり大きく違うように思う。1や2だとその一人だけで「女性全体としての評価」が

決まってしまうような怖さを感じる。Majorityとはいかないまでも、何人かいれば性別という記号ではなく個人としての評価になり、例え自分が失敗してもそれは筆者自身の責任である。男性(majority)であれば意識しなくて済むことが、女性(minority)でも意識しなくて済むまでは、女性枠という過渡期は必要だろうと思う。

思えば高専の学生時代から女性の少ないところばかりで暮らしてきたが、研究室でも筆者以外に女子学生がいたし、助教になったときも同じ学科に女性の先生がいらっした。そして今所属している研究センターには女性の助教の方がいる。まだまだ大学における女性研究者の数は少ないけれど、筆者が入るまで女性の数が0だったことは一度もない。偶然によるところも大きいですが、現在その程度には女性研究者がいる。これからは1を5、さらに10にしていくことが必要で、10のうちの1くらいなら筆者にも担えるのではないかと思っている。ライフプランや家族に対する考え方はさまざまであるし、自分の考え方も時とともに変わっていく。多様性のあるほうが、その都度、より自分に合った生き方を選択できるように思う。女子学生の進路選択に参考となるような女性研究者のロールモデルが必要と言われるが、今の少子高齢化社会では男性が育児・介護に積極的にかかわらないと生活していけない。女性が先輩女性研究者をロールモデルとして捉えるだけでなく、男性も長い人生の中で、ある期間は身近にいる女性の働き方をロールモデルと捉えて生き方を選択することも必要になってきているように思う。女性の割合が増えて「性別よりも個人差のほうが大きい」ということにいろいろな人に気づいてもらえたら、その頃には女性枠が必要のない時代になっているのではないかと勝手に思っている。